



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	大学の授業における教育内容論の教授(2) - 「こぶとり」の比較検討をとおして -
Author(s)	藤原, 幸男
Citation	琉球大学教育学部紀要 第一部(26): 263-268
Issue Date	1983-01
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1107
Rights	

大学の授業における教育内容論の教授(2)

— 「こぶとり」の比較検討をとおして —

藤原幸男

Teaching on Educational Substance Theory in Teacher Education (2)

Yukio FUJIWARA*

Today the instructive interpretation of the folkstale has come into wide use among students. I took up the folkstale "Kobutori" in Teacher Education, and analysed the response of the students about it. As the result I confirmed the tendency to interpret it instructive.

一 二つの「こぶとり」

「こぶとり」の比較検討は、「教科内容の訓育性」への認識をいっそう深めようとして、先に引き続き⁽¹⁾行なわれたものである。(実施1981年5～6月)。学生に検討させる素材として、前と同じく木下順二の再話(「こぶとり」『日本民話選』岩波少年文庫)と坪田譲治の再話(「こぶとりじいさん」『日本むかしばなし集(二)』新潮文庫)を選びだした。

木下の再話は、語り手がいつのまにかじいに同化してしまう語り方が取られていて、二人のじいの性格を論議させネライにせまるのに最適であるように思われる。文学的味わいも深い。とりわけ踊りに加わる場面、踊りの場面の描き方はすぐれている。踊り終わった場面などは論議を呼び起こすように思われる。そこでは最初のじいは、全くのお人好しではなく、計算高い側面も持っている。人間における両側面の混在をどう理解するかを読者はせまられるのである。

それに対して坪田の「こぶとりじいさん」は平易な口調で書かれているものの、人物描写があいまいで、行動の必然性が読みとりにくい。描写の仕方だけでなく、「外の目」からの描き方がされていて人物の心情が読みとりにくい点にも原因があるように思われる。この点に学生が気づくかどうか、一つの焦点である。また、文末の「それで、となりのおじいさんは右に一つ、左に一つ、二つのコブを持つ、大コブじいさんになってしまいました。人まねしてはならないというお話です。めでたし、めでたし。」における問題がある。「人まねしてはならない」という教訓がそれ以前の文章表現や筋の展開からでてくるかどうか、疑問である。このことに学生が気づくかどうか、もう一つの焦点である。

二 「中等教育原理Ⅱ」における比較検討

(1)授業の進め方

授業時間に教材文と作業用紙を配り、約30分間作業をさせた。作業用紙には、表現・文体、人物の描き方、話の進め方別の比較検討と、「どちらの『こぶとり』がおもしろいか」「子どもに話し

* Dept. of Education, College of Education,
University of the Ryukyus

て聞かせるとしたら、どちらを選ぶか」の設問を指示しておいた。前者は時間が足りなくてまだ書いていない学生もいたが、後者については、書いていないと議論できないので全員書くようにと指示し、しばらくして回収した。回収後すぐに学生の選択を分類した。その結果次のようになった。その数を黒板に記入し、分布状況を知らせた。

表1 授業での選択状況

	おもしろい	子どもに話して聞かせる
木下再話	38	18
坪田再話	11	31
両方		1

これを見ると、「どちらがおもしろいか」では木下再話を圧倒的に支持しているが、「子どもに話して聞かせる」では逆転し坪田再話が圧倒的に多くなっている。後者については、これほど多くなるとは予想していなかった。人数を確認した後で、それぞれの主要な意見を下記のように整理し、板書した。さらにそれをいくつかの論点にまとめ、学生たち同士で意見交換および話し合いを行なわせた。

表2 「おもしろい」の理由

	おもしろい
木下再話	<ul style="list-style-type: none"> 細かいところまで書いてある 迫力がある 表現がおもしろく動きがある 人物の心の動きがわかりやすい(心理的变化)が読みとれる 話を聞いているよう 昔話らしく、味がある
坪田再話	<ul style="list-style-type: none"> ストーリーが明確 なじみやすい “ほっぺたをふくらませたようなこぶ” というようにわかりやすい

人まねしてはいけない
というのは早計、抵抗がある

鬼でなく天狗
が出てくる

表3 「子どもに話して聞かせる」の理由

	子どもに話して聞かせる
木下再話	<ul style="list-style-type: none"> 語り口調で、話して聞かせるのによい トレレ トレレなどおもしろい表現
坪田再話	<ul style="list-style-type: none"> 話が簡単、単純でわかりやすい 全体として童話らしく、和やかな雰囲気 単純に善悪を区別できる 昔話の教訓が伝えやすい(人まねしてはならない)

簡略化されていて、論理的説得力がない
最後の表現で、「人まねしてはならない」というふうに道徳的にとらえている

最初のじいはずる賢い

木下再話を「おもしろい」とした学生は、「表現のおもしろさ」(9人)、「細かいところまで書いてあって、迫力がある」(7人)、「昔話らしい語り口調」(5人)を理由とし、21人の学生が表現のことに注目している。表現の点で、木下再話は多くの学生を引きつけている。他に描き方において、「人物の内面を表現していて、おじいさんの心情がわかりやすい」とするものが9人もいる。これに対して、坪田再話を「おもしろい」とした学生は数が少なく、「ストーリーが明確でなじみやすい」(4人)、「昔話らしい」「じいさんの気持がわかりやすい」(2人)、「鬼でなく天狗」(2人)などとなっている。

「子どもに話して聞かせる」では、「おもしろい」の場合と逆の傾向がでている。木下再話では、「子どもがたいくつせず、興味をもちそう」「表現がおもしろい」(13人)、「坪田再話における教訓が気に入らない」(5人)を理由としている。それに対して坪田再話では、「文体・表現がわかりやすい」「話が単純」(26人)、「善悪がはっきりしていて、教訓が伝えやすい」(7人)である。

授業では前半で「表現のおもしろさ」について

扱い、両再話を比較させたが、学生の考えはそれほど変わらなかったようだ。後半で教訓性について扱い、意見交流を行なった。その後で、大川悦生の「ふたりのじいのこと」⁽²⁾を読んでおいた。そうしておいて、とりわけ「人まねしてはならない」「最初のじいはずる賢い」に関わって、授業後に感想文を書いて提出するよう指示して授業を終えた。

（2）学生の反応

学生の感想文を読んでみて、さまざまな要素が影響を与えていることがわかった。多くの学生は木下再話の方が文学的にすぐれていておもしろいとしながらも、にもかかわらず、「子どもに話して聞かす」には坪田再話をあげている。そのあたりを、分析してみたい。

一つは、木下再話を子どもが理解できるかという疑問である。何人かの学生は、子どもに読解力がなければむづかしいのではないかととらえている。例えば、次のようである。

「木下氏の作品は、これはもう文学と言えらると思う。伝聞的な話によって読者を引き込んでいく。状況説明の言葉一つにしても、“重み”が感じられる。ある程度の国語力がないと、木下氏による作品の効果（うまみ）を把握できない」（80生、Y・S）

「木下順二氏の作品は、文章ひとつひとつが長く、その行間に、微妙な登場人物の心の動き、人間性を読み取る力がそなわっていなければ、その作品の内容や意味を把握するのが困難なのではないか。したがって、必然的に小学生あるいは中学生にとっては理解しにくい物語であろう。」（79生、Y・H）

このような疑問を解決するには、授業記録や子どもの反応がほしい。（本質的には、表現や文学性のゆたかな木下再話は歓迎されるのではないかと私は考えている。）

二つには、「人まねしてはならない」という坪田再話の部分には多くの学生が否定的で、かなりの学生が隣のじいさんの心境になって感想を書いている。

「坪田の方は、初めのじいさんを良いじいさん、後のじいさん人まねをした悪いじいさんとして

描いている。しかし人まねをしたことは、後のじいさんの立場に立ってみれば仕方のないことではないだろうか。邪魔でしょうがないこぶを取るのに、他にどんな方法があると言うのだろうか。それを、人まねをしたからだめだという結論を強制するのはどんなものだろうか。これに対し木下の方は、後のじいさんを単に失敗したじいさんとして描いている。むしろこの方が押しつけがましい教訓話よりも、単なる楽しい民話として素直に受け入れられるような気がする。」（79生、N・K）

「私は坪田譲治氏が最後に書いた言葉（“人まねしてはならないというお話です。めでたし、めでたし。”）に対して、大いなる反感をもっています。坪田さんが隣りのおじいさんの立場だったらどうでしょう。誰でも隣りに住んでいるおじいさんの立場だったら、やはり必ず一度は『あのおじいさんのように自分もこぶをとってもらいたい』と思うにちがひありません。そして誰でもとなりのおじいさんと同じように急に会いに山に登るはずです。」（79生、S・M）

「私は坪田先生の『こぶとりじいさん』を読んで論理性に欠いていると思いました。ちなみに、果してマネしたおじいさんは悪い人なのでしょう？ マネしたおじいさんは悪い性格の持ち主であるということは少しも書いてありません。踊りを踊ったり歌を歌ったりすることで、彼のこぶを取ってもらいたいと思うことは、悪いことなのでしょう？ 筆者が章末に書いた“人まねをしてはならないという話です。めでたし、めでたし”という結論は、いかにも早計で、説得力もなく、まちがった教訓のように思えます」（79生、I・N）

三つには、「人まねしてはならない」という教訓に多くの学生は否定的であるにもかかわらず、そのことが木下再話への評価に必ずしも直結していない。いく人かの学生においては、次にあげるように、隣のじいさんをかわいそうという気持ちが強まり、木下再話を必ずしも良しとしないのである。この点については、民話における民衆の生きざまを類似の民話の「つづけ読み」によって学生自らがつかみとることが必要となろう。また、そのような教材プログラムをどう作成するかが今後の研究課題となるであろう。

「木下再話のほうは、人物の心の動きや場面な

どがこまかく表現されている。内容は、坪田再話のような善悪を問題にした物語ではなく、人まねをした爺さんが損をしてしまったというかわいそうな話である。この爺さんは、前の爺さんよりたまたま踊りが下手だただけであり、爺さんにとっては精一杯だったろうに。私はこの爺さんに同情してしまいます。」(78生、M・K)

「自分の好みをぬきにして考えてみると、木下さんの方が坪田さんの方よりも善悪の差がない。木下さんの方を考えると、後に出てきたおじいさんは、ただ歌がへたで踊りも上手でないということだけで、こぶをもらったことになる。すると、この話は悲しい話となるのではないか。(78生、E・G)

「前者の爺は要領よく立ち回って事を自分の都合よく運んだけれども、後者の爺は要領が悪くうまくいかなかったとも言えるのではないかと思う。だとすれば、前者の爺はずるく、後者の爺は正直でシャイな人間であるといえよう。それならば、この話は正直者がバカを見る例であるとも言えるのではないかと思う。ごく単純に善悪を決めている方が理解しやすいといえるのではないだろうか。人それぞれの立場、考え方でどうにも解釈できるというのは、自由であって不自由なのではなからうか。」(80生、K・S)

三 「教育課程」における比較検討

(1)授業の進め方

「中等教育原理Ⅱ」の場合とほぼ同じように進めた。学生の選択を分類した結果、次のようになった。その数を黒板に記入し、分布の状況を知らせた。

表4 授業での選択状況(1)

	おもしろい	子どもに話して聞かせる
木下再話	22	21
坪田再話	9	10

表5 授業での選択状況(2)

おもしろい	子どもに話して聞かせる	人数
木下再話	木下再話	18
木下再話	坪田再話	4
坪田再話	木下再話	3
坪田再話	坪田再話	6

これを見ると、「中等教育原理Ⅱ」の場合と異なっていて、両者はいずれも同じような傾向を示している。逆の傾向(「おもしろい」では木下再話が多く、「子どもに話して聞かせる」では坪田再話が多い)になると思っていたので、予想外であった。受講生のちがいを反映しているのであろう。人数を確認した後で、それぞれの主要な意見を下記のように整理し、板書した。さらにそれをいくつかの論点にまとめ、学生たち同士で意見交換および話し合いを行なわせた。

表6 「おもしろい」の理由

	おもしろい
木下再話	<ul style="list-style-type: none"> ・表現が豊かで、おもしろい ・表現・会話が楽しい ・おじいさんの心理描写 ・ “ ” 心理変化がよく描けている ・味がある ・人物が生きている ・読むうちに引きつけられる
坪田再話	<ul style="list-style-type: none"> ・やんわりした明るい感じ ・表現が簡潔、読みやすい ・話が明快 ・天狗は親しみがもてる ・教訓話として書かれてあるところ

表7 「子どもに話して聞かせる」の理由

子どもに話して聞かせる	
木下再話	<ul style="list-style-type: none"> ・表現が豊か（擬声語） ・筋の展開がリズムカルでおもしろい ・じいさんの心中表現がされている ・臨場感
坪田再話	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもにも理解しやすい ・内容が明るい ・このおじいさんは下心がない。正直

人の不幸をよろこんでいる。教訓をおしつけている
ずる賢い

「おもしろさ」の点では、木下再話では「表現の豊かさ・楽しさ」（12人）、「おじいさんの心理描写」（7人）を理由としてあげている。これに対して坪田再話では、「表現の簡潔さ・読みやすさ」「話の明快さ」をあげている。ここに大きな差異がでている。

「子どもに話して聞かせる」では、「おもしろさ」に現われた点のいくつかは引き継がれているが、注目したいのは、相手を批判しているところである。木下再話の支持者は坪田再話を「人の不幸をよろこんでいる」「教訓をおしつけている」とし、坪田再話の支持者は木下再話にでてくる最初のじいを「ずる賢い」としている。授業ではこのところを中心に議論した。議論はかなり白熱し、盛りあがった。議論の成果は、授業後に提出された感想文に反映されている。

(2) 学生の反応

学生の感想文を読んでみると、「中等教育原理Ⅱ」の場合と共通する点をもちながらも、いくつかの点で異なっている。

反応の一つは、じいさんの心理描写に関わっての人物像の問題である。木下再話の支持者のいくつかは、「後のじいさんにしても、こぶを取りたいと思うのは人情ではないか」（79生、K・T）「誰もがいやな事から避けたいという気持ちをもっているのだから、後から出てくるおじいさんが自

分のいやだと思っているこぶを取ってもらいたいという気持ちもわかる」（78生、E・S）として、「人まねしてはいけない」の教訓部分を批判している。これに対して坪田再話の支持者は木下再話の良さを認めながらも——討論の成果であろう——、「しかしあまりにもおじいさんの心情が露骨に書かれるのも問題だと思う。『人間なら誰しもそう思うはずだ』ということで何でも可でも話の中に取り入れてしまっは悪影響をも与えかねない。例えばおじいさんが『しめたと思う』箇所は人間の本質を教えることよりも『人間のずるさ』の面が全面的に出ているし、さらにおじいさんは『しめたと思う』だけじゃなく心にもないことを演技してみせるのである。確かに人間の行動には裏表の両面を備えているが、この場合、おじいさんが心の中で鬼をあざむいたことで子ども達に優越感を与えてはいけないと思う。たとえ一晩にしろ一緒に飲み、歌い、踊った“友だち”ではないか。そのことの方が人間の本質ということよりも大切だと私は思う」（80生、N・K）と、最初のじいさんの「ずる賢さ」を批判しているのである。

二つには、子どもにおける自由な発想をめぐる問題である。

木下再話の支持者は、たとえば、「最後の所で『こぶとりじいさん』の方は人まねをしてはならないと書いており教訓的であるが、『こぶとり』の方は子どもにそれを考えさせる点でも教育的な内容だと思う」（79生、S・M）、「坪田再話では文中において、あまり人物について詳しく書いていないのに最後に結論みたいなものを読み手に強制するのは、少しおかしいような気がする。物語を読んでそれをどう読みとるかは、本人の自由な考えにまかせた方がよいような気がする」（79生、T・T）としている。

これに対して、坪田再話の支持者は、「最後の方の『人まねしてはいけないということですよ』という部分を見て、『自由な発想をさまたげるのでいけない』という意見がありました。私は、全然、何もつかめないよりはいいと思います。そして、物語を読んでいて心の中にもやもやという考えが浮かんでいる時に、それをきちんと知らせてあげることが、子どもに納得がいったよと思うのですが。木下さんの作品の場合は、いろいろ

な考えがあっていいのですが、複雑すぎて子どもには何を言わんとしているのか解らないと思う」(80生、M・Y)、「木下氏の作品では、おじいさんと読者を一体にさせるところがあり、心理的变化なども読者のものとして考えることはできるが、その局面での対応ということで大目にみてもかけひきがクローズアップされてくる以上、民話を聞く年齢の子どもたちには却って夢をみるということができないのではないか。一つの作品から教訓一つをおしつけるのが子どもたちの感受性を損ねると考えられないこともないが、空想は文体表現の中から様々に広がっていくもので、まして幼ない子どもには教訓を様々に考えるのは無理なところがあるのではと考える」(80生、Y・Y)としている。

三つには、国語教材として扱うか、道徳教材として扱うかという問題である。

「子供に読んでやる場合、作品を通して何かを教えるという意図をもつ。が、道徳の教材としてか、国語の教材としてかでは考え方が違うと思う」(79生、K・M)、「子どもに話して聞かせるならどちらがいいかと言えば、優劣はつけがたい。しかし教材として取り上げるのならどうか。その際、単に民話として捉えるか、国語教材、道徳教材としてか、捉える立場からの判断に差異があるかどうかという疑問が生じてきた。……(中略)……扱う教材の対象で両話の価値を位置づけたい」(79生、R・K)という意見がある。

これに関わって、「ただ単に『何々をしてはいけないというお話でした』等といったことで、教育的・教訓的に結びつけようとするのは、その教材の持つべきおもしろさを壊しかねないのではないか。……教訓的には書かれていないが、

『こぶとり』の方は魅力も充分にあるし、場面毎に変化していくおじいさんの心情がよくとらえられ、又、そこを問題にすることによって教育的な気さえもするのである。」(79生、T・Y)「坪田本における『善』『悪』は、実直で人真似をしないか、否かで判断するべきだ。木下本については、そうとばかりもいえない。総合的能力の所有者こそが『善』なのである。子供に『善』『悪』の観念を叩きこみなければ、坪田本を与えておけばよからう。これは道徳(修身)用である。しかし、子どもの独創性、自己の確立を高めさせようとするなら木下本に限る。『善』『悪』の問題は簡単に割り切れるものではない。そのあり様は、複雑にして摩訶不思議なアラベスクである。それを、あやふやな価値観で枠に入れて子供に教える道徳教育はもう不必要だ。木下本を与えて、現代社会における枠のない新しい現代道徳教育を施すべきだろう」(79生、T・K)という批判的な意見がある。

そこでは、国語・道徳のどちらで扱うかよりも、「道徳の見直し」や、「作品を文学として豊かに読みとっていくことが道徳になる」という見解、したがって国語教材→道徳教材とみる見解が萌芽的に示されていると見ることができよう。この点を、議論でつめていく必要があったと考えられる。

注

(1)拙稿「大学の授業における教育内容論の教授——『民話教材の比較検討』をとおして——」、『琉球大学教育学部紀要』第25集第一部、1981年12月。

(2)大川悦生『むかしむかし絵本18、こぶとり』ポプラ社、1968年。